

## アストゥリアス語口語コーパスとその分析

黒澤 直俊

Naotoshi KUROSAWA

### 1. はじめに

アストゥリアス語は、ガリシア・ポルトガル語とカスティーリャ語の中間を占めるアストゥリアス・レオン諸語<sup>1)</sup>に分類され、このグループでは他にカスティーリャ・レオン自治州のレオン語とポルトガルのミランダ語が現在でも話されている。現代のアストゥリアス語はスペイン北部のアストゥリアス自治州のナビア Navia 川以西を除く地域<sup>2)</sup>と、中南部の山岳地帯に続くカスティーリャ・レオン自治州の一部にかけて分布し、方言的には西部方言、中央方言、東部方言に分けるメネンデス・ピダル (Menéndez Pidal 1906) 以来の区分や、オビエド大学のガルシア・アリアス (García Arias 2003) による南西部方言と北東部方言への分類などが知られている。前者の中央方言の大部分はガルシア・アリアスでは北東部方言で、山岳部にあたる中央方言の南部地域が南西部方言に含まれる。これはラテン語の *pl-, cl-, fl- > ll- [ʎ]* に対応する音が西部方言の一部では *ll vaquero* 「牛飼いのll」<sup>3)</sup> と呼ばれる舌尖齒茎破擦音で対応するが、この音が東にむけて中央方言の南部山岳地帯まで分布していることや、語末の *-as* (沿岸部では *-es*) も同じような分布を示すことなどを考慮したものであろう。半島北部の帯状地域はガリシアから地中海までバスク語を除き断絶のない方言連続体 (Penny 2000) で、アストゥリアス地域も言語変種が漸進的に推移する領域である。アストゥリアスでは東西にわたる言語変異に加え、南部一帯が山岳部でイベリア半島の他から隔離されるが、南北の言語差も大きい。

アストゥリアス自治州政府とオビエド大学が共同で設置しているアストゥリアス言語アカデミー *Academia de la Llingua Asturiana* がその教育や普及、規範制定を行っている。メディアや公共機関での使用が意図されている規範は80年代以降のもので、州都など都市がある中央沿岸部の方言を基に他の方言特徴の異綴りなどを認めたものだが、州での法的な位置付けが保護対象言語で公用語ではないので、話し手数は人口の10分の1程度と言われている。州内では初等中等教育から高等教育まで選択科目としてのアストゥリアス語の教育が保障され、小説や詩などの文学作品の出版も比較的盛んでテレビやラジオではアストゥリアス語の番組が複数放送されている。ほとんどの話し手はカスティーリャ語 (=スペイン語) との2言語使用者でダイグロシヤ状態における下層言語であり、実際の言語運用ではカスティーリャ語的要素が混在する。本稿ではアストゥリアス語の比較的自然な発話をコーパス化して分析を試みる。

## 2. アストゥリアス語口語コーパスの試み

口語コーパスに近いものでは、アストゥリアス民衆博物館 Muséu del Pueblu d'Asturies が刊行しているアストゥリアス語音声地図 Atlas Sonoru de la Llingua Asturiana がある。年齢層の高い話者を対象に90年代後半から州内各地で発話を録音したもので、現在まで6巻が刊行され博物館のWeb<sup>4)</sup>には音声と転写テキストがすべて公開されている。方言特徴や伝統的な民話、小話、逸話などを知るには貴重な資料だが、山間部の農村が収集地域で、規範に近い都市部がある沿岸や北部は含まれていない。そこで本研究ではパイロット的にアストゥリアス人研究者<sup>5)</sup>の協力を得、口語コーパスを作成してみることにした。アストゥリアス語の母語話者である調査者が8名の調査対象者と10編の自然会話<sup>6)</sup>を試み、録音して転写した。全体で100分程で総語形数は16108形式、異なり語形数は2961語形である。調査者と調査協力者はすべて中央部沿岸のヒホン/シション Gijón / Xixón 市から約30キロ内陸に入ったエル・エントレーゴ El Entrego 市周辺で生まれ育っている。調査者を除き人文系の高等教育や教室でのアストゥリアス語の学習歴はほとんどない。Martínez Álvarez 1996の「素朴なアストゥリアスの話し手」のプロフィールに合致し、普段の言語生活はアストゥリアス語の特徴の残るスペイン語と語彙の一部にスペイン語的影響が現れるアストゥリアス語の間を推移する。調査者はアストゥリアス語で会話するが、相手につられてスペイン語になる場合もある。対象者によっては、録音という人工的な会話場面で自然にアストゥリアス語では発話できないような例もある。厳密な検証がもちろん必要ではあるが、全体の主観的印象としては調査者と対象者のあいだに言語的な差異があるとは感じられない。転写はアストゥリアス語の正字法にそったものであるが、正字法に含まれないような形も起きる。母音の発音は音的に近い文字が当てられる場合がある。

会話の一部を引用する。(6)「幽霊と犬」(注6)参照)の冒頭部分である。Aが調査者、Bが対象者である。

- A: Bueno y ¿Qué tal?, ¿Ónde tuvisteis esti fin de semana entós?  
B: pues na, esti fin de semana marchemos pa ahí, pa lo de la Llosa de Fombona.  
A: ¿Ónde queda eso?  
B: nun pueblu de Luanco. Y ye un hotel rural porque hacíamos un aniversario y entonces queríamos ir el fin de semana pasáu que era cuando lu hacíamos realmente pero...como era fiesta, había puente y estaba too ocupao. Y entonces fuimos esti fin de semana.
- A: さて、元気？ところで、今週末はみんなどこに行ってたの？  
B: そうね、週末は向こうへ行っていて、リョーサ・デ・フォンボーナのほうへ。  
A: どこにあるのそれ？  
B: ルアンコの町に、田舎風のホテルで、誕生日だったから、実際の誕生日だった先週末に行きたかったんだけど、祝日で連休が続いたでしょ、どこもいっぱい、今週末に行ったの...

調査者のアストゥリアス語にもスペイン語が混じり、非規範形も起こる。「週」はアストゥリアス語で *selmana* で、動詞の変化形は規範では *tuvistis~tuvistis* で、*tuvisteis* ではない。状態動詞 *tar* 「いる、ある」の直説法完了過去 *pretéritu indefiníu* の2人称複数形だが、スペイン語

の *estuvisteis* の影響かもしれない<sup>7)</sup>。対象者もおおむねアストゥリアス語であるが、*hacíamos* (= *facíamos*)、*era* (= *yera*)、*estaba* (= *taba*) はスペイン語である。しかし、アストゥリアス語の *nun* (= *en + un*)、*ye* (= *es*)、*esti* (= *este*) も見られる。*na* は *nada* の省略形でディスコースマーカ的に用いられる。*too* (= *todo*)、*ocupao* (= *ocupado*) はアストゥリアス語の規範形であるが、このような母音間の *-d-* の脱落はスペイン語でも知られている現象である。ただし、ここで *ocupao* は男性単数形ではなく「中性形」と称される不変化形の過去分詞である。地名は *Lluanco* であるべきであるが、*Luanco* も公式には併用される。このように両言語の特徴が混在しているのがアストゥリアスの日常的言語運用である。スペイン語の副詞 *entonces* 「その時、それなら」は、アストゥリアス語では *entós* だが *entonces*、*entónce*、*entonces* もアストゥリアス語の辞書 (Manzano et Rodríguez 2001, p.99, apud *entós*) には挙げられている。このような場合、スペイン語かアストゥリアス語かを問うことに意味があるとは思えない。混在的状況の言語事実が先にあり、スペイン語かアストゥリアス語かという解釈は後付けに過ぎない可能性がある。

上の会話をアカデミーの規範に近い形に書き換えてみた。変えた部分を斜体で示した。

A : *Bono y ¿Qué tal?, ¿Ónde tuvistis esti fin de selmana entós?*

B : *pues na, esti fin de selmana marchemos pa ahí, pa lo de la Llosa de Fombona.*

A : *¿Ónde queda eso?*

B : *nun pueblu de Lluanco. Y ye un hotel rural porque facíamos un aniversariu y entós queríamos dir el fin de selmana pasáu que yera cuando lu facíamos realmente pero... como yera fiesta, había ponte y taba too ocupao. Y entós fuimos esti fin de selmana.*

対象者の *marchemos* (動詞 *marchar* の直説法完了過去 1 人称複数形) や *pasáu* (動詞 *pasar* の過去分詞男性単数形) の対応するスペイン語の標準形は *marchamos*、*pasado* なので、アストゥリアス語的とも言える。しかし、*-ar* 動詞の完了過去 1 人称複数形で母音が *e* になる現象や母音間の *-d-* の脱落、語末無強勢母音の *-o* が狭くなる現象などは、アストゥリアス語に限らず半島のスペイン語系方言では広く知られている (Penny 2000) ことも理解する必要がある。また、*ponte* / *puente* が示すように二重母音化の条件は方言ごとに異なる。

### 3. アストゥリアス語の言語特徴と口語コーパス

アストゥリアス・レオン諸語が分布した地域はポルトガルを除きスペイン語が上層言語だったため、特定の方言がコイネー化することなく漸進的に方言が推移する領域を形成した。Martínez Álvarez 1996 は「アストゥリアスの諸方言 *las hablas asturianas* はスペイン語 *el español* の単なる地域変種でスペイン語から独立したロマンス語の変種としては量的にも質的にも十分な特徴を欠いている」<sup>8)</sup> (ibid., p.119) とし、さらに「素朴でそれほど訓練を受けていない (アストゥリアスの) 大部分の話し手はカスティーリャ語化されたアストゥリアス語の表現からアストゥリアス語の特徴が残ったスペイン語のレジスターにごく自然に特に意識することなく移行する」<sup>9)</sup> (ibid., p.120) と述べている。前半の引用に関して言えば、言語特徴の程度や

有無からアストゥリアス語は独立した言語でなくスペイン語の「方言」と結論付けているように見えるが、特定の言語変種を「独立した言語」とするか否か、あるいは該当する言語権の主張には社会的に様々な条件が関係するので、言語学的な特徴のみから判断するには無理があると言える。客観的な言語事実から結論できないものを含む政治的な問題であると考えべきである。Martínez Álvarez 1996 をはじめとして、ガリシア語との言語境界は七母音体系か五母音体系かに関わるシステムの断絶で、方言間の違いを超えた独立した言語の間の、すなわち、スペイン語の「方言」とガリシア語との境界であると主張している。確かに、ラテン語の ē と ō に起源する母音の二重母音化の結果、俗ラテン語の半広母音 /e/, /o/ が失われ、母音体系の単純化が起こったのは事実だが、その特徴境界線を体系全体の解釈に絡めているだけではないか。さらに、後半の引用で指摘される事実は上層言語がスペイン語なので生じる現象だが、拡大解釈すればアストゥリアス語とレオン語は方言でポルトガルのミランダ語は言語であるという結論にもなる。他に、アストゥリアス語が「言語」でない根拠に求心的な規範が存在しないことが指摘される。「漸進的な方言連続体」で特定の下位方言がコイネー的位置を占めないのは歴史的な偶然であり、逆にスペインやポルトガルで言語規範の形成が行われたのも歴史的偶然と言える。歴史をあたかも言語特徴が必然的に具現化した結果のように絶対視し、アストゥリアス語は方言であるから、現在の規範形成のプロセスは「人工的で政治的」だと決めつける立場には問題があると言わねばならない。地域少数言語は今までなかった規範を人工的に確立し求心的な状況を作り出さない限り将来的には必ず消滅することも忘れてはならない。とはいえ、Martínez Álvarez 1996 が指摘するアストゥリアスの素朴な話し手の言語運用は今回の録音からも確認できる。日常的な場ではスペイン語の特徴が必ず混在し、純粋なアストゥリアス語の言語運用が見られることは少ない。アストゥリアス語教育ではスペイン語と対照してアストゥリアス語の諸特徴が指摘されるが、以下にコーパスの中で見いだされるいくつかを挙げる。

#### 1) 無強勢母音の弱化：

無強勢位置で綴り字の «e» や «o» に対応する発音は [i]~[e] (~[ɛ]), [u]~[o] (~[ɔ]) の揺れを示すことがあり、語源や慣習表記が正字法上は採用されている。コーパスでは *pequeñina* (1), *pequeñinos* (1)~*piquiñina* (1), *piquiñines* (1), *piquiñinos* (1) の対や *bolsos* (2)~*bolsus* (1), *anilles* (5)~*anillis* (1), *fai*(1)~*fae* (1), *fainse* (1) (*faense*), *lus* (1) (*los*), *mediu* (2)~*medio* (1) \*, *minerus* (1) (*mineros*), *números* (2)~*númerus* (1), *picus* (1) (*picos*), *tiempos* (2)~*tiempus* (2), *tortos* (2)~*tortus* (1) がある (数字は生起数, 対の最初の語形は正字法に近い形, 単独の例では生起数のあとに括弧の斜体で規範形を示した。\**medio* は他に 3 例あるがいずれも副詞で, 副詞は -o が規範的な語尾)。ひとつひとつについて転写や音の性質を調べる必要はある。なお、該当する地域では無強勢母音の音韻体系は語末、非語末を問わず /i, e, a, o, u/ の 5 母音である。

2) アポストロフアシオン *apostrofación* :

冠詞や前置詞、代名詞、接続詞が前後の語と結合し母音が脱落する現象をアストゥリアス語の規範文法ではアポストロフアシオンと呼んでいるが、以下の最後の例に見られるように、定冠詞 *el* が後続語ではなく先行語に接続するのはアストゥリアス・レオン語に特有の現象とされる。

*l'orbayu* (← *el + orbayu*) 細雨 *l'argayu* (← *el + argayu*) 崖くずれ *l'asturiana* (← *la + asturiana*) アストゥリアス女  
*d'Uviéu* (← *de + Uviéu*) オビエドの *tien qu'entamar* (← *que + entamar*) 彼(女) は始めなければならない  
*nun se m'escaez* (← *me + escaez*) 私は忘れていない *Garra'l llibru*. 彼(彼女) は本をつかむ (← *garra + el llibru*)

定冠詞 *el* と後続語の場合を除き、語境界を越え連続する母音の一方が消える現象であると言える。<sup>10)</sup>

コーパスでの例は多く、全体で113例あり、うち9例が定冠詞男性単数形が先行語との接続である。(括弧の数は生起数)

定冠詞男性単数が先行語に接続：*bebe'l* (1), *conozco'l* (1), *cortame'l* (1), *donde'l* (1), *hasta'l* (1), *llegó'l* (1),  
*porque'l* (1), *ye'l* (2)

それ以外で2例以上のもの：*d'arañes* (2), *d'arriba* (3), *d'él* (5), *d'ella* (2), *d'elles* (3), *d'ellos* (4), *d'eso* (4), *d'esos*  
(3), *d'estes* (2), *d'esto* (2), *d'un* (2), *m'acuerdo* (3), *p'abajo* (2), *p'allá* (4), *p'allí* (2), *p'aquí* (2), *p'arriba* (3), *p'atrás* (2),  
*qu'andar* (2), *qu'había* (3), *qu'hacer* (3)

3) 素材の中性 *neutro de materia* : 形容詞に中性と呼ばれる形があり、名詞の不加算性を示す。スペイン語やポルトガル語も指示代名詞などには中性と称するものが類似する用法を示す。形容詞は男性単数/女性単数/男性複数/女性複数/中性の5つに変化し、男性単数が *-u* で終わるものは、*bonu / bona / bonos / bones / bono* 「よい」のように変化する(下線が中性)。名詞を直接修飾するとき形容詞は名詞の前後で性数一致するが、名詞が具体的な素材などで不加算的に用いられると、名詞に後置されたり述語的に用いられる形容詞は名詞の本来の文法性に一致しない中性形が用いられる。例えば、名詞 *sidra* 「シドラ」(アストゥリアス特産のリンゴの発泡酒) は女性名詞で不加算なので、*bonu* 「よい」という形容詞で修飾すると *la sidra bono* 「そのよいシドラ」(下線が中性形) となる。ただし、前置されると *la bona sidra* で形容詞は女性形である。<sup>11)</sup> 述語的な用例は以下。

*El carbón ye prieto.* 石炭は黒い (男性単数形の *prieto* は使われない)

*Esta sidra nun ta malo.* このシドラは悪くない (女性単数形の *mala* は使われない)

コーパスでは名詞を直接修飾する中性形は見られなかったが、述語的用法で中性の例があった。*barato* はコーパスで2回現れ、ひとつが女性名詞の *carne* 「肉」に呼応している。(Bは対象者II)<sup>12)</sup>

A: ¿Carne nun comáis? 肉は(その頃は) 食べなかった?

B: Poco. 少し

A: ¿Qué era mui caro? 結構高かった?

B: va, barato no era na tampoco, pero carne era lo que menos se comía, pescao, güevu, patates frites, tortilla y así んー, 安くはなかったけど, でも肉はあまり食べないほうで, 魚とか, 卵とか, フライドポテト, トルティーリャとかは (よく食べたけど)

A: y ahora, colo que te presta a ti la carne ¿eh? で, 今はあなたが好きなのは肉でしょ, ね?

形容詞や過去分詞の中性形はコーパスでは amañoso, amontonao, ancho, aproximao, barato, frío などがあるが, 述語的に用いられたり, 大過去として複合時制の過去分詞であった (異なり語形数62, 総生起数328, うち過去分詞は異なり語形数31, 総生起数40で, 形容詞には副詞と区別出来ないものや過去分詞か形容詞か判然としないものもある)。

#### 4) 目的語代名詞の位置:

強勢のない目的語代名詞は, 肯定の主文では動詞に対し後置され, 否定語や副詞の一部が動詞句に先行する場合や従属文では動詞の前に置かれる。コーパスでは肯定の主文の定形動詞に対して目的語代名詞が前置されているのは15例で, 後置が圧倒的であった。<sup>13)</sup> この点で現代スペイン語とは対照的で, ポルトガルのポルトガル語に近いと言える。次の例は半過去形の動詞 cortaba に me と lo が後置されている。

... a ver, cortábame lo la modista y... (対象者VIII) …要するに, 仕立て屋が私にそれ (=布地) を切って…

しかし, スペイン語の語順がないわけではなく, 次のような例もある。再帰代名詞の se が前置を引き起こす要素がないにもかかわらず動詞の前にある。興味深いことに, 続く ser 動詞はスペイン語の cs でなく, アストゥリアス語形の yc である。

... pero ya franquear, se franquea poco, porque ahora ye todo a base de... (対象者I)

でももう切手を貼るのは, 少し貼るだけで, というのはもう今は全部ほとんどは

#### 5) 時制:

複合過去が未発達であることがアストゥリアス語の特徴とされているが, スペイン語のような助動詞 haber の直説法現在形+過去分詞は一例も現れない。すべて単純形で503例ある。アオリスト的なものも含まれているから, スペイン語の現在完了にすべてが対応するわけではない。規範文法 Academia 2001, p.225では, haber+過去分詞の形式は助動詞が不定詞である場合か接続法未完了過去で, かつ感嘆のイントネーションで用いられるとしている。大過去形も単純形だが, コーパスでは単純形の大過去は現れず, すべて haber の半過去形+過去分詞 (中性形) であることが目に付く。全体で19例ある。

...“na, nosotros no tuvimos ..” que habíen hecho mui pocos y... (対象者II)

全然, 私たちは何もなくて..., というのは彼らがしたのはほんの少しだけなので...

Pues ahí tuvimos y dije-ylo a Virginia que habíes tao en el Chiquito,... (対象者III)

あの, そこに私たちはいて, ビルヒニアにエル・チキトに前にいたねと私は言った他に, 以下のような助動詞の haber が不定詞で現れる例が2例ある。

.. podía haber siguío insistiendo más pero... como tengo más cosas qu' hacer, ... (対象者I)

もっと執着して続けることもできたかもしれないけど, 他にやることもあったし...

直説法（単純）大過去と接続法未完了過去は形が同じで、いずれもスペイン語の ra 形に対応するものである。しかし、コーパスから見る限り、口語では大過去には複合形が用いられるようである。規範文法は tener+過去分詞（中性形）で、「過去のある時点から繰り返し起こったり継続している事象を表現する」が、こちらはコーパスには現れない。唯一 tener が分詞を伴う表現は以下で、授業 la clase を受ける代名詞 la に一致した女性単数の過去分詞 prepará が tener の直説法現在1人称単数形と用いられる例だけである。

... entós la clase del miércoles yá la tengo medio prepará tamién... (調査者)

ところで水曜日の授業はもう半分準備してあって

アストゥリアス語では接続法未完了過去の se 形は本来の形ではなく、ra 形を用いることが規範文法で奨励されている。しかし、コーパスには ra 形は12例、se 形のほうも13例存在する。

#### 6) 語彙：

コーパスに現れるスペイン語的語彙とアストゥリアス語的語彙の例を以下に示す。数字は生起数、変化形のあるもので引用形に代表させたものには\*を付けた。

スペイン語	アストゥリアス語	スペイン語	アストゥリアス語	スペイン語	アストゥリアス語	スペイン語	アストゥリアス語
algo 36	daqué 0	mismo* 14	mesmu* 0	madre 47	ma 19	hijo 5	fiu 7
asi 70	asina 0	sastre 12	xastre 0	mucho 57	munchu 2	para 1	pa 178
aunque 5	anque 0	vez 24	vegada 0	no 395	nun 61 non 0	あの頃	daquella 10
ayer 6	ayeri 0	dijo 57	dixo 0	dinero 6	perres 4 dineru 1	en vez de 0	envede 2
bueno* 103	bono* 0	empezar 18	entamar 0	trabajar* 24	trabayar* 18	mujer 0	muyer 2
colegio 1	colexu 0	después 28	depués 46 dempués 0	gustar* 104	prestar* 2	だけ	namás 13
ejemplo 9	exemplu 0	hacer* 114	facer* 14	entonces 35	entós 97	niño 0	neñu 10
dejar* 16	dexar 0	hombre 22	home 8	es, era* 133	ye, yera* 218		
gente 26	xente 0	ir* 50	dir* 30	estar* 39	tar* 140		

詳細な調査とは言えないが、スペイン語が圧倒的に用いられアストゥリアス語が現れないもの、いずれもそれなりの割合で用いられるものが目に付く。アストゥリアス語的語彙がまきっているのは entós, ye, yera, tar, pa, neñu などであった。小さな子供を意味する neña (4), neñes (2), nenos (1), neños (1), neñu (2) など10例がアストゥリアス語固有の語彙で、スペイン語の niño は現れない。さらにスペイン語の mucho と派生形は57例あるが、アストゥリアス語の munchu の変化形は2例しかない。表とは別に、アストゥリアス語では母音間の -d- が脱落したり、前置詞の de が任意に省略される現象があるが、コーパスでは un platu cocido が2回現れている。un platu de cocido 「煮込み料理」の de が落ちたもので、他に、de lado 「横に」の意味での delao が2例ある。

#### 4. まとめ

以上、アストゥリアス語において特徴的と主張されている言語特徴のいくつかを取り上げ、コーパスでどのように現れるか検討した。コーパス自体が純粋なアストゥリアス語やスペイン語ではなく、両者の特徴が混在することは明らかな事実ではあったが、アストゥリアス語の一定の特徴、無強勢母音の弱化やアポストロフアクション、形容詞の中性、目的語代名詞の語順、近過去の表現での単純形の使用などは十分確認できる事実であった。他に、過去完了に規範文法で奨励されているとは言えない複合形が使われることも分かった。語彙についても一定の傾向があるかどうか今後検討する必要がある。

#### 註

- 1) このグループの総称は伝統的にはレオン語 *leonés* だが、レオン地域の現代方言と重なるので、最近では *astur-leonés* が一般的。本稿ではアストゥリアス・レオン語とした。
- 2) 西部のエオ *Eo* 川とナビア川に挟まれる地域は、母音間の *-i* や *-n* が脱落し、ラテン語の *Ī* と *Ō* に起源する母音を二重母音化しないのでガリシア・ポルトガル語に分類される。ガリシア・アストゥリアス語 *gallego-asturiano* とかエオ・ナビ語 *eonaviego* と呼ばれ、自称名は *fala* である。エオ・ナビ地域に対応する形容詞として *eonaviego*, *-a* が現地では用いられる。なお、この地域の一部では母音間の *-i* が脱落しない。
- 3) 西南部の *Somiedo* の方言では、この舌尖歯茎破擦音に対し舌背歯音の破擦音 [tʃ] が音韻的に対立する (Cano González 1981, p.67) : *pušeiru* : *pucheiru*, *raša* : *racha*, *šoro* : *choro* などのミニマルペアが挙げられる (ibid., 同書の表記は [ʃ])。現行の正字法では中央方言の *ll* [ʎ] に対応するので、*l* の下に点を打ち!! と表記するか、*ll* または *l.l* とされる。
- 4) [http://redmeda.com/web/?page\\_id=4657](http://redmeda.com/web/?page_id=4657)
- 5) オビエド大学のイシア・モンテス・ルビオ *Itziar Montes Rubio* の協力を得た。アストゥリアス語母語話者で、アストゥリアス語の語学教育に携わっている若手である。
- 6) 調査対象者に関する情報と会話のテーマは以下のとおり：

対象者 I : 男性, 60歳, エル・エントレーゴ市生まれ	対象者 V : 男性, 25歳, エル・エントレーゴ市生まれ
対象者 II : 女性, 86歳, エル・エントレーゴ市生まれ	対象者 VI : 女性, 20歳, エル・インフィエスト町生まれ
対象者 III : 女性, 51歳, エル・エントレーゴ市生まれ	対象者 VII : 女性, 78歳, ラングレウ市生まれ
対象者 IV : 女性, 56歳, エル・エントレーゴ市生まれ	対象者 VIII : 女性, 79歳, エル・エントレーゴ市生まれ

  

(1) 趣味の収集 <i>coleccionismu</i> (対象者 I)	13分	(6) 幽霊と犬 <i>Ente pantasmes y perros</i> (対象者 VI)	17分
(2) 食べ物 <i>comida</i> (対象者 II)	6分	(7) 幼年時代 <i>Infancia</i> (対象者 VII)	6分
(3) よもやま話 <i>conversa cotidiana</i> (対象者 III)	13分	(8) 人生の思い出 <i>Recuerdos de vida</i> (対象者 II)	9分
(4) 裁縫 <i>coser</i> (対象者 IV)	11分	(9) 人生を振り返って <i>Resume d'una vida</i> (対象者 VIII)	13分
(5) 日曜の自転車競技 <i>Domingos de bici</i> (対象者 V)	5分	(10) 仕事と余暇の時間 <i>Tiempu de vagar y trabayar</i> (対象者 II)	8分

- 7) もちろん、該当地域のアストゥリアス語バリエントに *tuvisteis* がある可能性も否定できない。動詞の変化形には方言的変種が多いことが指摘されている。



8) Martínez Álvarez の原文は「カスティーリャのロマンス語 el romance castellano とアストゥリアスの諸方言 las hablas asturianas がそれぞれ形成された歴史 (independencia histórica) にもかわらず、後者はスペイン語 el español の単なる地域変種」で、castellano と el español という語を使い分けている。単純にアストゥリアス諸語がスペイン語 (=カスティーリャ語) の方言であるとは言っていない。

9) La mayoría de los hablantes ingenuos y no demasiado cultivados pasa, con mínimos matices y sin ningún esfuerzo, de una expresión asturiana más o menos castellanizada a otro registro español en que perduran rasgos asturianos. (ibid., p.120)

10) ポルトガル語では統語的な母音連続では最初の母音が消えるが、アストゥリアス語の男性単数定冠詞が先行する語に接続する場合は後続する母音が消えるのが特徴的である。

ポ) vende o cavalo 彼は馬を売る: ['vêda] + [u] + [kə'valu] → ['vêduke'valu]

この現象はミランダ語にもあり、現行のミランダ語の正字法は定冠詞の男性単数形を l とし、休止や子音の後では [əl]、母音の後では [l] と発音するとしている。

例: l gato [əl'gatu] その猫 Bi'l gato ['bil'gatu] 私はその猫を見た

11) 規範では \*la sidra bona は誤りとされるが、「素材の中性」はアストゥリアス全域に見られるわけではない。無強勢の語末で -u と -o が対立しない地域では素材の中性は la sidra bonu (o) で現れる。Penny 1970 はカンタブリア地域山岳部に残存したアストゥリアス・レオン語を扱っているが、形容詞の中性形は語尾ではなく、男性形で語源的な -u によるメタフォニアが起こり強勢母音が狭くなることから、逆にメタフォニアの不在によって示されるという。さらに、部分的だが名詞にも中性があり、アストゥリアスの諸方言全体に共通するものでは pelo 「髪の毛」、filo 「糸」、fierro 「鉄」が挙げられる。変化形は単数/複数/中性の3つ (pelu, pelos, pelo; filu, fillos, filo; fierro, fierros, fierro) で、髪の毛全体をさすときは pelo、一本の毛を意味するときは pelu が用いられるという。ちなみに、これらの名詞の文法性は男性である。名詞によっては意味の転移が起こる場合があるという報告 (Andrés 2003, p.44) がある。女性名詞の vaca 「雌牛」を述語的に feu 「醜い、よくない」という形容詞に一致させる文脈で、中性形を用いると牛全体にかかわる内容、すなわち「牧畜業」になるという。

La vaca véola fea. その雌牛は姿がよろしくないと思はる

La vaca véolo feo. 牧畜は(状況が)よくないと私は思はる

12) このような用法はポルトガル語でも見られないわけではない。後半の came era lo que... のように、いったん中性の代名詞表現で受け、形容詞と名詞の修飾関係にワンクッションあるからである。動詞 (era) はスペイン語なのに na, pescao, güevu, patates frites などアストゥリアス的である。

13) 目的語代名詞の全体の生起数は数えていないが、語形から直接わかるものでは *lu* 26, *me* 80, *te* 63, *nos* 6, *mos* 3, *vos* 2 である。定冠詞と重なるものは *los* 112, *la* 375, *les* (*lis*) 85, *las* 4, *lo* 184 であり、他に動詞に接辞されている例が相当数あるが、数えていない。

(この研究は平成28年度科学研究費基盤研究A「コーパスに基づく談話の結束性の研究」(研究代表者峰岸真琴)の支援により遂行された。)

#### 参考文献

- Academia de la Llingua Asturiana (2001). *Gramática de la Llingua Asturiana. Tercera edición*. Uviéu : Academia de la Llingua Asturiana.
- Alvar, Manuel ed. (1996). *Manuel de dialectología hispánica - El Español de España. 2007<sup>a</sup>* Barcelona: Ariel.
- Andrés, Ramón d' (2003). *Cuestiones d'asturianu normativu. Vol.III*. Uviéu : Publicaciones Ámbitu.
- Cano González, Ana María (1981) *El habla de Somiedo, occidente de Asturias*. Universidade de Santiago de Compostela. (2009, Uviéu : Academia de la Llingua Asturiana.)
- Cuetos, Fernando, Alfred Álvarez, José Ramón Alameda (1997). *Diccionariu de frecuencies léxicques del asturianu*. Uviéu: Academia de la Llingua Asturiana.
- Gracia Arias, Xosé Lluis (2003). *Gramática Histórica de la Lengua Asturiana. Fonética, Fonología e Introducción a la Morfosintaxis Histórica*. Uviéu: Academia de la Llingua Asturiana.
- 黒澤直俊 (2014) 「アストゥリアス語の所有表現の一形式 *de mio* (/to/so...) をめぐって—周辺言語、特にポルトガル語との関係から—」, 『東京外国語大学論集第89号』, 東京外国語大学, pp.111-130, 2014 (平成26)年12月31日.
- Manzano, Pablo et Urbano Rodríguez (2001). *Diccionariu Básicu de la Llingua Asturiana*. Xixón : Ediciones Trea.
- Martínez Álvarez, Josefina (1996). “Las hablas asturianas”, in Alvar ed., pp.119-133
- Menéndez Pidal, Ramón (1906). *El Dialecto leonés (Prólogo, notas y apéndice de Carmen Bobes, 1962)*. Oviedo: Instituto de Estudios Asturianos.
- Penny, Ralph (1970). *El habla pasiega : ensayo de dialectología montañesa*. London : Tamesis.
- Penny, Ralph (2000). *Variation and Change in Spanish*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Ramos Corrada, Miguel (coord.) (2002). *Historia de la lliteratura Asturiana*. Uviéu: Academia de la Llingua Asturiana.